昭和 22 年以後 17 年間のわれわれの教室における 皮膚結核の統計的観察 (第 3 報)

日本医科大学皮膚科教室 (主任：丸山千里教授)

丸 山 千 里
Chisato Maruyama

浦 辺 清 道
Kiyomichi Urabe

本 田 光 芳
Mitsuyoshi Honda

藤 田 栄 一
Eiichi Fujita

埴 原 哲
Satoshi Haibara

原 田 誠 一
Seiichi Harada

福 本 寅 雄
Torao Fukumoto

新 田 蹕 男
Takuo Nitta

植 田 時 司
Tokishi Ueda

宗 像 醇
Atsushi Munakata

文 入 正 敏
Masatoshi Fumiiri

三 浦 恒 久
Tsunehisa Miura

瀬 底 洋 子
Yoko Sesoko

緒 言

日本医科大学皮膚科教室では皮膚結核の統計的観察について、すでに第 1 報 (昭和 22 年～昭和 30 年)、第 2 報 (昭和 31 年～昭和 34 年) と 2 回にわたり発表したが、今回第 3 報として昭和 22 年より昭和 38 年までの 17 年間における統計的観察を試みた。われわれの教室では丸山により皮膚結核のワクチン療法が実施されているため、皮膚結核患者の数も比較的によく昭和 22 年より昭和 38 年の 17 年間に 582 例の患者を扱っている。これらの症例について行なつた統計的観察を報告する。

統 計 的 観 察

昭和 22 年 1 月より昭和 38 年 12 月までの満 17 年間の皮膚科外来患者総数は 36,503 名、全皮膚結核患者数は 582 名で皮膚科患者総数に対する百分率は 1.60% であり、その内訳は結核疹 329 例、真正結核 253 例であった。

(1) 年次の消長

各年次別皮膚結核患者数は、昭和 27 年の 63 例 (3.05%) が最高で、昭和 22 年の 15 例 (1.04%) が最低である。皮膚結核全体としての傾向は昭和 22 年より昭和 26 年までの 5 年間は真正皮膚結核が結核疹より多く、昭和 27 年より 38 年までの 12 年間の患

者数は結核疹が真正皮膚結核より多いことである (表 1. 図 1)。

皮膚科外来患者総数に対する年次別百分率は昭和 23 年の 3.26% が最高を示し、昭和 37 年の 0.81% が最低を示しているが、17 年間の百分率は 1.60% でこれは他の施設と比較してみるといづれも 1% 以下であるのに対して、かなりの高率を示していることになる (表 1. 図 2)。

(2) 疾患別頻度

17 年間を通じて最も多いのはバザン氏硬結性紅斑の 167 例 (28.60%) で、次いで皮膚腺病の 120 例 (20.55%)、尋常性狼瘡 104 例 (17.82%)、顔面播種状粟粒性狼瘡 91 例 (15.59%)、が多く他は著しく少い。すなわちバザン氏硬結性紅斑、皮膚腺病、尋常性狼瘡、顔面播種状粟粒性狼瘡の 482 例で実に全皮膚結核患者の 82.53% を占めており、真正皮膚結核と結核疹との比率は 253 : 331、すなわち 1 : 1.3 で結核疹が少々多いが両者の年次の消長をみると前にものべた通り昭和 27 年以後は結核疹が真正皮膚結核に比して多くなっている。これは明かに真正皮膚結核の逐年減少に対して結核疹の相対的増加を示すものである (図 1, 図 2 は全皮膚結核、真正皮膚結核、結核疹それぞれの患者数と対皮膚科外来患者総数百分率を示す)。

表 1

年 度	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	合計	皮膚結核患者 総数に対する 比率%
疾 患 名																			
バザン氏硬結性紅斑	1	6	8	7	8	19	15	10	13	7	13	8	8	17	8	6	13	167	28.60
結節状結核性静脈炎		3		1	3	2			1	1			1	1				13	2.22
陰 茎 結 核 疹		3		1	2	4	1	2			2	1	2	2		2	2	24	4.11
壞疽性丘疹状結核疹	1	1		2	2	4	1		3	5		3	1	3	1		3	30	5.31
顔面播種状粟粒性狼瘡		3	1	1	1	5	2	3	8	3	6	2	2	11	8	11	24	91	15.59
腺 病 性 苔 癬						1												1	0.17
環 状 肉 芽 腫									1		1	1						3	0.51
小 計	2	16	9	12	16	35	19	15	26	16	22	15	14	34	17	19	42	329	56.53
尋 常 性 狼 瘡	8	19	6	11	10	7	7	5	7	2	5	1	1	10	1		4	104	17.82
皮 膚 腺 病	5	19	13	9	16	14	6	5	4	6	3	1	3	6	6	1	3	120	20.55
皮 膚 疔 状 結 核		3	5	2	3	7	1			2	1	1	2	1			1	29	4.97
小 計	13	41	24	22	29	28	14	10	11	10	9	3	6	17	7	1	8	253	43.64
總 計	15	57	33	34	45	63	33	25	37	26	31	18	20	51	24	20	50	582	
皮膚科外来患者総数	1,446	1,748	1,524	1,671	1,825	2,096	2,153	2,283	2,942	2,244	2,235	2,241	2,126	2,423	2,363	2,453	2,730	36,503	
皮膚結核患者数の皮膚科外 来患者総数に対する百分率 %	1.04	3.26	2.23	2.03	2.47	3.05	1.53	1.10	1.26	1.16	1.38	0.85	0.89	2.10	1.02	0.81	1.83	1.60

図 1

図 2

(3) 性 別

男子は 200 例, 女子は 382 例で, その比率は 1:1.92 で女子は男子の約 2 倍の数値を示している。真正皮膚結核の男女数は 91 例と 162 例で, 比率は 1:1.78, 結核疹の男女数は 109 例と 220 例でその比は 1:2.04 である。疾患別では硬結性紅斑, 尋常性狼瘡, および皮膚腺病において女子頻発の傾向が著しく 582 例中 311 例 (53.44%) を占める。顔面播種状粟粒性狼瘡, 壞疽性丘疹状結核疹, 結節状結核性静脈炎は男女ほぼ同数で, 皮膚疔状結核だけが男子が多く女子の約 5 倍あり男女数は 24 例と 5 例でその比率は 4.8:1 である (表 2)。

(4) 初診時年令

582 例のうち 21~30 才が最も多く 252 例 (43.30%), 31~40 才 111 例 (19.07%), 11~20 才 97 例 (16.67%), 41~50 才 53 例 (9.11%), 51 才以上 46 例 (7.90%), 0~10 才 20 例 (3.44%) で 1 番少く, 21~40 才は 363 (62.37%) に達し, 全体の半ば以上を占めている (表 3)。

(5) 初発年令

不明の 35 例を除き初発年令をみると, 21~30 才が最も多く 202 例 (35.75%) を占め, 次いで 11~20 才 147 例 (26.02%), 31~40 才

表 2

疾患名	性 別	男	女	比 (男:女)	計
バザン氏硬結性紅斑		13	154	1:11.81	167
結節状結核性静脈炎		6	7	1:1.17	13
陰 莖 結 核 疹		24	0	24:0	24
壞疽性丘疹状結核疹		14	16	1:11.4	30
顔面播種状粟粒性狼瘡		51	40	1.28:1	91
腺 病 性 苔 癬		0	1	0:1	1
環 状 肉 芽 腫		1	2	1:2	3
小 計		109	220	1:2.02	229
尋 常 性 狼 瘡		22	82	1:3.73	104
皮 膚 腺 病		45	75	1:1.67	120
皮 膚 疣 状 結 核		24	5	4.8:1	29
小 計		91	162	1:1.78	253
合 計		200	382		582
皮膚科外来患者総数					36,503
皮膚結核患者数の皮膚科外来患者総数に対する百分率 %		0.5	1.05		1.59

81 例 (14.34%), 0~10 才 45 例 (7.96), 41~50 才 35 例 (6.19%), 50 才以上 20 例 (3.54%) で、皮膚結核全体としては 11~30 才が 368 例に達し、半ば以上を占め青年期頻発の傾向が認められる (表 4)。

真正皮膚結核と結核疹とに分け検討してみると真正皮膚結核では 10 才以下の幼少年期に初発しているものが少なくないのに反して結核疹では比較的青年期に頻発する。

(6) 発病以来初診までの経過年数

不明の 31 例を除く 467 例の経過年数は尋常性狼瘡、皮膚腺病、皮膚疣状結核等の真正皮膚結核は年数の長いものが多く、結核疹は一般に短いものが多い。すなわち前者の 216 例のうち 136 例 (63.94%) は 2 年以上で、後者は 246 例のうち 183 例 (74.39%) は 2 年以内で両者の間にはかなりの相違がある (表 5)。

表 5

疾患名	経過年数	半年以内	~1年	~2年	~3年	~4年	~5年	~10年	~15年	~20年	~25年	25年以上	不明	合 計
バザン氏硬結性紅斑		55	17	14	7	4	4	11	3				9	124
結節状結核性静脈炎		6	1					2	1					11
陰 莖 結 核 疹		4	3	2	2			2	1	2				16
壞疽性丘疹状結核疹		8	1	2			2	2	2				2	19
顔面播種状粟粒性狼瘡		30	26	14	5			1						76
尋 常 性 狼 瘡		4	5	6	7	6	9	14	8	11	8	6	3	87
皮 膚 腺 病		29	16	18	5	4	5	10	1	2			14	104
皮 膚 疣 状 結 核		1		1	1	1	3	11	3	1		1	2	25
そ の 他		1	1					2					1	5
合 計		138	70	57	27	15	23	55	19	17	8	7	31	467

表 3

疾患名	年 令	0 ~ 10	11 ~ 20	21 ~ 30	31 ~ 40	41 ~ 50	51 ~	不明	合計
バザン氏硬結性紅斑		1	32	90	23	11	9	1	167
結節状結核性静脈炎		0	1	7	4	1	0	0	13
陰 莖 結 核 疹		0	1	7	8	6	2	0	24
壞疽性丘疹状結核疹		1	2	10	14	2	1	0	30
顔面播種状粟粒性狼瘡		0	8	48	21	9	5	0	91
腺 病 性 苔 癬		0	0	0	0	0	0	1	1
環 状 肉 芽 腫		1	0	2	0	0	0	0	3
尋 常 性 狼 瘡		1	14	24	23	18	24	0	104
皮 膚 腺 病		14	32	51	13	5	4	1	120
皮 膚 疣 状 結 核		2	7	13	5	1	1	0	29
合 計		20	97	252	111	53	46	3	582

表 4

疾患名	年 令	0 ~ 10	11 ~ 20	21 ~ 30	31 ~ 40	41 ~ 50	51 ~	不明	合計
バザン氏硬結性紅斑		1	59	59	19	9	4	10	161
結節状結核性静脈炎			2	6	2	1		2	13
陰 莖 結 核 疹			6	4	5	4	2		21
壞疽性丘疹状結核疹		1	5	14	4	1	1	2	28
顔面播種状粟粒性狼瘡			11	49	18	10	4		92
環 状 肉 芽 腫		1		1					2
尋 常 性 狼 瘡		15	17	25	24	7	6	2	96
皮 膚 腺 病		18	33	38	9	2	2	16	118
皮 膚 疣 状 結 核		9	12	5			1	2	29
そ の 他			2	1		1		1	5
計		45	147	202	81	35	20	35	565

(7) ツベルクリン反応

2,000 倍旧ツベルクリンを使用して皮内反応を 332 例に実施した。

反応の判定は 48 時間後に行ない、発赤径 4 mm 以下を陰性 (-), 5~9 mm を疑陽性 (±), 10 mm 以上を弱陽性 (+), 10 mm 以上で硬結を判然と触知出来る場合を中等度陽性 (++)、硬結ある上に二重発赤、

水疱ある場合を強陽性 (卅) とした。結果は陰性 24 例 (7.23%), 疑陽性 12 例 (3.61%), 弱陽性 136 例 (40.96%), , 中等度陽性 85 例 (25.60%), 強陽性 136 例 (22.59%) で陽性例は 296 例 (89.16%) を示す。陰性および疑陽性 36 例の内訳は顔面播種状粟粒性狼瘡 21 例, 硬結性紅斑 7 例, 皮膚腺病 3 例, 陰茎結核疹 2 例, 結節状結核性静脈炎, 尋常性狼瘡, 皮膚症状結核はそれぞれ 1 例で陰性率 10% 以上のものは結節状結核性静脈炎, 陰茎結核疹, 顔面播種状粟粒性狼瘡である (表 6)。

表 6

ツベルクリン反応	陰性	疑陽性	弱陽性	中等度性	強陽性	症例数
疾患名						
バザン氏硬結性紅斑	6	1	36	18	24	85
結節状結核性静脈炎		1	1	4	2	8
陰茎結核疹		2	1	2	3	8
壞疽性丘疹状結核疹			5	4	4	13
顔面播種状粟粒性狼瘡	14	7	36	14	5	76
環状肉芽腫			1	1		2
尋常性狼瘡	1		21	20	19	61
皮膚腺病	2	1	26	15	16	60
皮膚症状結核	1		8	6	1	16
その他			1	1	1	3
計	24	12	136	85	75	332

(8) 赤血球沈降速度

426 例の初診時血沈 1 時間値を比較すると表 7 のごとくであり, 判定は 0~9 mm 正常 10~19 mm 弱促進, 20~29 mm 中等度促進, 30 mm 以上強促進の 4 段階に分けて観察したが, 正常のもの 116 例で 310 例はいずれも促進しているが弱促進の 107 例と中等度促進の 106 例の合計が丁度半数の 50% を占めており, 強促進も 97 例の多くを示している。このうち陰茎結核疹, 顔面播種状粟粒性狼瘡, 皮膚症状結核では半数以上のものが正常血沈値を示している (表 7)。

表 7

赤沈値	正常	弱促進	中等度促進	強促進	症例数
疾患名					
バザン氏硬結性紅斑	16	34	40	28	118
結節状結核性静脈炎	1	3	5	3	12
陰茎結核疹	8	1	2	3	14
壞疽性丘疹状結核疹	3	1	5	6	15
顔面播種状粟粒性狼瘡	48	16	8	1	73
尋常性狼瘡	12	25	18	22	77
皮膚腺病	11	25	24	29	89
皮膚症状結核	16	1	3	4	24
その他	1	1	1	1	4
計	116	107	106	97	426

(9) 合併症

118 例のうち他の皮膚結核を合併しているものは 51 例 (43.22%) で壞疽性丘疹状結核疹が最も多く 13 例を占め, 結節状結核性静脈炎, 硬結性紅斑, 皮膚腺病にそれぞれ 8 例を認めた。

皮膚以外の合併結核性疾患は 67 例 (56.78%) で肺結核が最も多く 43 例 (36.44%) で, 淋巴腺結核 13 例 (11.02%), 骨関節結核 7 例 (5.93%) が認められる。淋巴腺結核, 骨関節結核を合併するものは 20 例のうち 17 例 (85%) が皮膚腺病である。肺結核を合併するものは皮膚腺病の 37.23%, 尋常性狼瘡の 30.23%, 硬結性紅斑の 11.63%, 壞疽性丘疹状結核疹と皮膚症状結核がそれぞれ 6.98%, 陰茎結核疹の 4.65%, 結節状結核性静脈炎の 2.33% である (表 8)。

(10) 胸部レ線像

314 例の胸部レ線像の所見は表 9 のごとくである (但し同一症例で 2 以上の所見を有するものはそれぞれの項に別々に記載した)。異常のないものは 134 例 (42.68%) で, 顔面播種状粟粒性狼瘡, 陰茎結核疹では異常のないものの方が多いが, その他の疾患ではなんらかの所見を呈するものの方が多い。これら所見のうち助膜癒着 45 例 (11.15%), 肺門淋巴腺石灰沈着 38 例 (12.10%), 肺野石灰沈着 25 例 (7.96%), 浸潤型肺結核症 17 例 (5.41%), 硬化性肺結核症 15 例 (4.78%), 限局巣状肺結核症 11 例 (3.50%), 肺門淋巴腺腫脹 8 例 (2.55%) で, レ線像において肺に変化の認められるものは真正皮膚結核が結核疹よりも多い。

(11) 結核に関連ある家族歴および既往歴

記載の明確な 135 例のうち, 家族歴に結核性疾患のあるもの 27 例 (20%), ないもの 108 例 (72.59%) である。また既往歴に結核性疾患を認めるもの 67 例 (49.62%), 認めないもの 68 例 (50.37%) で, 真正皮膚結核と結核疹とにわけると家族歴に結核を認めるものは前者の 7 例 (23.33%) に対し後者は 20 例 (19.05%) である。既往歴に結核を認めるものは前者の 16 例 (53.33%) に対して後者は 51 例 (48.57%) で, 両者の間には著明な差異はない (表 10)。

総括および考察

われわれは日本医科大学皮膚教科室で昭和 22 年以後昭和 38 年までの 17 年間の皮膚結核患者 582 例について統計的観察を行なったので, その成績を少しく考察してみたい。

わが国における皮膚結核の頻度は昭和 20 年以前の

表 8

合併症 疾患名	尋常性狼瘡	皮膚症状結核	皮膚腺病	腺病性苔癬	壞疽性丘疹状結核疹	顔面播種状粟粒性狼瘡	陰茎結核疹	硬結性紅斑	結節状結核性静脈炎	肺結核	腎結核	副睾丸結核	腹膜・肋膜結核	淋巴腺結核	骨関節結核
バザン氏硬結性紅斑	1		2		7				4	5					
結節状結核性静脈炎	2		2		3	1	3			1		1			
陰茎結核疹					1				1	2					
壞疽性丘疹状結核疹				1		1	1	5		3					
顔面播種状粟粒性狼瘡					1										
尋常性狼瘡			2					1	1	13			1	1	1
皮膚腺病	2	2						2	2	16			1	12	5
皮膚症状結核			2							3	1				1
腺病性苔癬					1										
その他															
合 計	5	2	8	1	13	2	4	8	8	43	1	1	2	13	7

表 11 (1)

年 度		2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
京 都 大 学	症例数	19	33	24	15	19	25	21	30	21	32	26	49	24	19	15	16	25
	百分比	0.41	0.71	0.52	0.34	0.48	0.64	0.47	0.72	0.58	0.92	0.76	1.38	0.75	0.63	0.49	0.60	0.86
大 阪 大 学	症例数									20	28	41	32	53	47	79	32	26
	百分比									0.3	0.4	0.58	0.41	0.63	0.59	0.96	0.40	0.40
弘 前 大 学	症例数																	
	百分比																	
大 阪 市 立 大	症例数																	
	百分比																	
鹿 児 島 大 学	症例数																	
	百分比																	
東 医 歯 大	症例数																	
	百分比																	
広 島 大 学	症例数																	
	百分比																	
日 本 医 大	症例数																	
	百分比																	

報告では1%内外で、昭和20年以後においても三浦他の1.23%より谷奥他の0.2~0.4%まで種々であるが大体1以下で皮膚結核患者の頻度は年次の消長に

一定の傾向はないとされている。表11のなかで京都大学、大阪大学の二校のみをもつて20年を中心に終戦前と終戦後を比較すると昭和21年以後が昭和20年

表 9

胸部レ腺像 疾患名	異常なし	肺門 淋巴 腺腫脹	播種 状肺 結核 症	浸潤 型肺 結核 症	増殖 性肺 結核 症	限局 巣状 肺結 核症	硬化 性肺 結核 症	混合 型肺 結核 症	肋 膜 炎	肋 膜 癒着	肋 膜 肺 底 形成	肺野 石灰 沈着	肺門 淋巴 腺石灰 沈着	加療 変形
バザン氏硬結性紅斑	30	2		4	5	2	1			6	1	8	10	
結節状結核性静脈炎	1									3		1	1	
陰茎結核疹	3						2						2	
壞疽性丘疹状結核疹	3	1		1	1		1			2			2	
顔面播種状粟粒性狼瘡	45									2		6	5	1
環状肉芽腫	1													
尋常性狼瘡	20	3	3	2		5	4	1		16	2	6	7	1
皮膚腺病	23	2		9	1	4	5	1	2	14		3	8	2
皮膚疣状結核	8			1			2			1			2	
その他										1		1	1	
合 計	134	8	3	17	7	11	15	2	2	45	3	25	38	4

表 11 (2)

19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	合計
16 0.66	13 0.28	9 0.18	15 0.38	21 0.61	25 0.77	28 0.83	17 0.44	47 1.01	38 0.76	55 1.00	52 0.87	40 0.67	36 0.56	31 0.48	40 0.60	41 0.60	32 0.45	37 0.50		1.009 0.63
40 0.67	38 0.64	24 0.84	52 1.18	54 1.11	59 1.17	60 1.20	74 1.34	69 1.10	105 1.33	76 1.00										1.009 0.76
		2 0.17	7 0.57	5 0.39	6 0.43	3 0.23	3 0.19	6 0.34	5 0.26	12 0.56	8 0.42	12 0.62	5 0.30	8 0.47	14 0.89	10 0.61				106 0.44
				13 0.56	12 0.51	15 0.67	14 0.53	8 0.33	22 0.74	19 0.59	15 0.41	17 0.34	18 0.34							153 0.50
								13 0.63	23 0.87	31 1.11	16 0.52	5 0.15	15 0.49	15 0.60	13 0.40	10 0.32	7 0.22	14 0.44		162 0.51
								9 0.40	20 0.71	13 0.39	18 0.46	13 0.30	18 0.40	22 0.47	32 0.73	27 0.68	24 0.56			194 0.51
												16 0.89	18 1.15	21 0.79	21 0.70	34 1.02	39 1.08			149 0.94
			15 1.04	57 3.26	33 2.23	34 2.03	45 2.47	63 3.05	33 1.53	25 1.10	37 1.26	26 1.16	31 1.38	18 0.85	20 0.89	51 2.10	24 1.02	20 0.81	50 1.83	582 1.60

以前よりも少々増加の数値を示し、これが大体全般の傾向ではないかと推測出来る。

先に年次の消長のところで表 1・図 1・図 2 をも

つてのべたごとく昭和 27 年を境として昭和 22 年～26 年までの 5 年間は真正皮膚結核が結核疹より多く、昭和 27 年より昭和 38 年までの 12 年間の患者数は

表 10

疾 患 名	家族歴に結核を認めるもの	既往歴に結核を認めるもの	症 例 数
バザン氏硬結性紅斑	10	23	32
結節状結核性静脈炎		1	2
陰 茎 結 核 疹		2	5
瘰癧性丘疹状結核疹	2	8	11
顔面播種状粟粒性狼瘡	7	17	54
環 状 肉 芽 腫	1		1
尋 常 性 狼 瘡	2	5	12
皮 膚 腺 病	5	10	15
皮 膚 疔 状 結 核		1	3
合 計	27	67	135

反対に結核疹が真正皮膚結核より多いことは注目に値することである。

表 11 は各大学の皮膚結核の頻度を示したものであるが、これをわれわれの統計と比較してみると、1.60%はかなり高率の数値であることが認められる。昭和35年～昭和38年間のわが教室における最近4年間の百分率をみても1.45%で、これは第1報(昭和22年～昭和30年)の1.94%にはおよばないが第2報(昭和31年～昭和34年)の1.07%よりは高率であり、この事実は、わが教室では、丸山による結核ワクチン療法の実施の成果のためと思われる。

む す び

日本医科大学皮膚科教室における、昭和22年から昭和38年までの17年間の皮膚結核患者582例について統計的観察を行ない、次の成績を得た。

- 1) 皮膚科外来患者総数に対する百分率は1.60%で年次の消長に一定の傾向は認められない。
- 2) バザン氏硬結性紅斑の167例(28.60%)が最高で、真正皮膚結核と結核疹の比率は1:1.3である。
- 3) 昭和27年を境として、27年以前は真正皮膚結核が多く、27年以後は結核疹が多い。
- 4) 男子より女子が多く比率は1:1.92である。硬結性紅斑、尋常性狼瘡、皮膚腺病は女子に多く、皮膚

疣状結核は男子に多い。

- 5) 初診時年齢は21～30才が多い。
 - 6) 初発年齢も21～30才が多い。
 - 7) 真正皮膚結核が結核疹よりも発病以来の経過年数が長い。
 - 8) ツベルクリン皮内反応の陽性率は89.16%である。
 - 9) 血沈値の促進を認めたものは426例のうち310例である。
 - 10) 皮膚結核相互合併は43.22%、肺結核の合併は56.78%
 - 11) 314例中180例(57.32%)に胸部レ線像の変化を認めたが、かかる変化は真正皮膚結核に多い。
- 以上の統計のうち尋常性狼瘡については、宇田(皮性誌 63, 337, 昭和28年)の報告、血清学的研究は宗像(皮性誌 63, 1, 昭和28年)、武田(日泌会誌 44, 52, 昭和28年)、新海(日医大誌 23, 615, 昭和31年)、細菌学的検査は松下(皮と泌 18, 157, 昭和31年)、バザン氏硬結性紅斑は長堀(日皮会誌 69, 147, 昭和34年)、顔面播種状粟粒性狼瘡は松浦(日本医大誌 28, 687, 昭和36年)らの詳細な報告がある。

参 考 文 献

- 1) 小池正晃：日皮会誌, 26, 460 (大15年)
- 2) 山川初子：皮紀要, 13, 343 (昭4年)
- 3) 谷奥喜平他：臨皮泌, 4, 106 (昭25年)
- 4) 宇田貞一郎：日皮会誌, 63, 337 (昭28年)
- 5) 鳥越 漸：日皮会誌, 63, 172 (昭28年)
- 6) 谷奥喜平他：臨皮泌, 8, 765 (昭29年)
- 7) 三浦祐晶他：日皮会誌, 65, 435 (昭30年)
- 8) 樋口謙太郎：臨床と研究, 32, 1239 (昭30年)
- 9) 丸山千里他：日医大誌, 23, 941 (昭31年)
- 10) 皆見吾省他：皮と泌, 24, 151 (昭34年)
- 11) 宗像 醇他：臨皮泌, 14, 703 (昭35年)
- 12) 谷村忠保他：皮膚臨床, 3, 497 (昭36年)
- 13) 松浦鉄造：日医大誌, 28, 687 (昭36年)
- 14) 佐藤吉昭他：日皮会誌, 74, 479 (昭39年)

(受付：1965年10月29日)